

世界遺産都市ジョージタウンの変容する ツーリズムスケープ

—歴史遺産地区の観光化をめぐるせめぎあい—

藤 卷 正 己

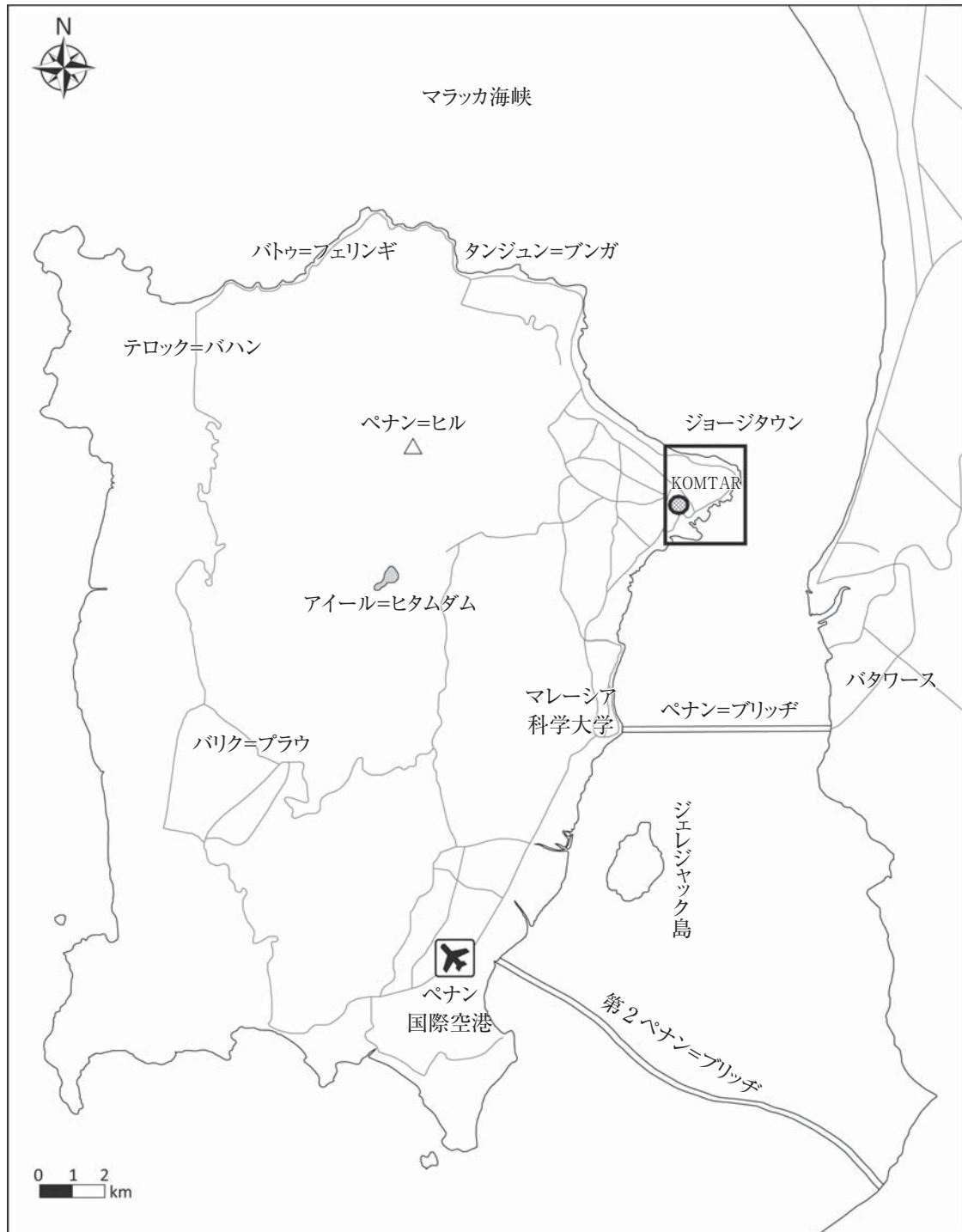
I. はじめに

1990年代より本格的に観光立国をめざしてきたマレーシアは、外国人訪問者数の世界ランキングにおいて、2013年では第11位(2,572万人)、アジアでは中国に次いで第2位の集客力を誇るまでに至った¹⁾。1987年当時、同国への外国人訪問者数はわずかに336万人でしかなく、初めてのVisit Malaysia Yearを打ち出した1991年においても585万人を数えるに過ぎなかった。しかし、1997年のMalaysia Truly Asiaキャンペーンの開始以降、(国際ツーリズムの沸騰に水差す数多くの出来事が世界各地で発生したことにより乱高下を示したものの)、全体として右肩上がりの成長をみせ、2000年には1,022万人、Visit Malaysia 2007キャンペーンを展開した同年には2,090万人へと着実に外国人ツーリストの集客数を増大させた。そして、マラッカとジョージタウンが「マラッカとジョージタウン、マラッカ海峡の歴史都市群」として世界遺産登録された2008年には2,210万人、その後の2011年では2,471万人、さらに2013年には2,572万人へと増加の一途をたどってきている²⁾。

シンガポールやタイ、インドネシア、フィリピンに比べて国際的に知名度が低かったマレーシアが国際ツーリズムの主要な目的地となった背景には、マレーシアプラン(5カ年計画)のもと、マレーシア政府観光局(通称:「ツーリズム=マレーシア」(Tourism Malaysia))による外国人観光者の集客を企図した広報活動(“Visit Malaysia Year”、“Malaysia Truly Asia”キャンペーン)や、エコ・エスニック・教育・メディカル・グルメなど、さまざまな名称を冠した多種多様な観光商品の開発という国家戦略の展開があった³⁾。

ところで、近年のマレーシアへの外国人訪問者の観光行動について概要を報告した『マレーシアの観光政策』⁴⁾によれば、外国人訪問者数が約2,460万人を数えた2010年度における主な州別訪問先として(複数回答)、第1位のクアラルンプル・スランゴール(52.9%)に次いで、ジョージタウンを中心市街地とするペナン(39.2%)が第2位の地位を占めた(第3位はマラッカ17.8%)。前年度の2009年では目的地の上位3地域の順位は同じであったが、訪問者の割合においてクアラルンプル・スランゴール56.9%、ペナン30.1%、マラッカ20.3%であったことから、ペナンの地位が相対的に高まっていることがわかる。同報告書では、州別訪問者数の実数は明記されていないが、同国への外国人訪問者数と州別訪問者率によれば、ペナンへの訪問者数は2009年で710万人、2010年では963万人であると推定されることから、入り込み客数(実数)自体、大幅に増加したことがうかがわれる⁵⁾。同じく世界遺産に登録されたマラッカ⁶⁾の訪問比率が低迷するなかで、野党が政権を握ってきたため連邦政府から冷淡な対応をされてきたペナンの観光目的地としての地位の向上は注目されよう。

州としてのペナンは、2本のペナンブリッジで結ばれるマレー半島本土側とペナン（ピナン）島（Pulau Pinang <マレー語>：^{びんろうじゅ} 檳榔樹の島）から成るが、本稿でいうペナンとは英領植民地期には「プリンズ＝オブ＝ウェールズ島」と名づけられ、オリエンタリズム的まなざしによって「東洋の真珠」と西洋人から賞賛されてきた島（東西12km、南北24km）を指す。ペナンの主要観光地は、すでに1980年代よりビーチ＝リゾートとして知られ、高級ホテルや日本人などの長期滞在者向け高級コンドミニアムが立ち並ぶバトゥ＝フェリンギやタンジュン＝ブンガなどの北部臨海部と、北東部に位置するジョージタウン旧市街地である（第1図）。



第1図 ペナン島および周辺地域
(谷崎友紀作図)

かつてのジョージタウンは（少なくとも 1985 年に初めて同地を訪れた筆者の印象では）、間口は狭く奥行きが深い造りのショップハウス（shophouse：棟割店舗兼住居）やタウンハウス（棟割町家）の老朽化が著しく、空き家が各所にみられるような、再開発されないまま植民地期の街並みを残す空間でしかなかった。しかし 1990 年代に世界遺産観光がブームになるにともない、英領植民地期の〈コロンIALな〉建築様式や、多様な人種・民族的要素が混淆する歴史的街並みが〈観光（者）のまなざし〉⁷⁾の対象となり、2008 年 7 月のユネスコ世界遺産登録を契機に、観光メディアや SNS で交わされる「口コミ」を通して〈コロンIAL〉、〈エキゾチック〉、〈ノスタルジア〉といった惹句に誘われたツーリストが訪れる歴史遺産地区として注目を浴びるようになった。

それにともない老朽化した、あるいは空き家として放置されてきたショップハウスやタウンハウスの資産価値が高まり、外部資本のみならず近年では地元企業によっても、ゲストハウスやブティックホテル、カフェ、レストラン、アートギャラリーなどに転用されるなど、その街並みは変容しつつある。加えて、2000 年代に入り〈芸術の島 ペナン〉を打ち出すようになったペナン州政府の振興策によって、ショップハウスの壁面を活用したウォール＝アート（wall arts）やワイヤ（アイアン）＝アート（wire/iron arts）が新たな観光アトラクションとなり、遺産地区を訪れる観光者の数を増大させた。また、外国人バックパッカーのエンクレーブ（enclave）であった旧市街地は、国内外からの家族連れなど多様なツーリストが街歩きするにぎわう観光空間へと変質しつつある。いいかえれば、イギリスによる植民地支配の過程で築かれてきた〈コロンIAL〉な歴史的建造物や街並みを資源としてきたジョージタウンにおいては、従来の〈ポストコロンIAL＝ツーリズム〉（post-colonial tourism）論だけでは解釈できない⁸⁾ 新たな〈ツーリズムスケープ〉（tourismscape）⁹⁾ が生成されようとしている。加えて、世界歴史遺産地区の隣接地域では、遺産観光ブームに便乗するかのようになり、さまざまな開発プロジェクトが進行しつつある。こうして本稿では、近年、急速に変貌をとげつつあるジョージタウンにおける〈ツーリズムスケープ〉のありようについて考察を加えるものである。

II. ジョージタウンの世界遺産地区

1. ビーチリゾートの島から世界遺産の島へ

ペナンを訪れる人々は、ペナンに対してどのような場所イメージを抱き、何を期待し、来島するのだろうか。マレーシア科学大学のツーリズム関連の研究所（Sustainable Tourism Research Cluster, Universiti Sains Malaysia）が、ペナン州政府観光局（Penang Global Tourism）の委託を受けて、2012 年 7～9 月（Q3）と 10～12 月（Q4）に行った調査結果が参考になる¹⁰⁾。

それによると、ペナン訪問の目的としては「レジャー／レクリエーション／休暇」が最も多く Q3・Q4 の平均で 52.4%、次いで「友人・親戚訪問」12.7%、「教育／研究／講義」10.3%、「商用・専門的活動」10.0%となっている。また、「ペナンでの活動目的・予定」（複数回答）（Q4）では、5 段階評価のうち上位 2 段階の合計で見ると「ローカルフードをたのしむ」¹¹⁾ 66.3%、「遊覧」61.4%、「遺産／歴史地区訪問」49.9%となっている。さらに「ペナンのイメージ」に関しては、「ローカルフード」20.4%、「世界遺産地区」20.2%、「砂浜」19.9%、「多文化社会」17.9%（Q3・Q4 の平均）という回答が得られている。

以上のことから、アンケート調査項目にあらかじめ設けられた選択肢の中から選ぶ回答方式によるものであり、また予想したとおりの結果とはいえ、ペナンは「ビーチリゾートの島」であるとともに、「世界遺産地区」および「多文化社会」としてイメージされている。つまり、〈トロピカリティ〉、〈歴史カリティ〉、〈マルチエスニシティ〉の複合（総じて言えば〈ローカリティ〉）がペナンの魅力、あるいは有力な集客資源となっていることが、あらためて確認されたと言えよう¹²⁾。

ところで、かつてペナンの代名詞と言えば、「ビーチリゾートの島」であった。それゆえ、外国からのパッケージツアー客やリゾートライフを楽しむ人々向けの高級ホテルなど、宿泊施設のほとんどがバトゥ＝フェリングやタンジュン＝ブンガなどの北部臨海地に集中していた。これに対して、旧市街地のジョージタウンは英領植民地時代以来のビジネス空間、もしくは再開発が進まず歴史的建造物が残存する地区でしかなく、ペナンの観光拠点はビーチリゾート地に限定されていたといっべくよからう。しかし後述するように、2000年の「家賃統制令」の解除、歴史遺産観光ブームの到来、とくに2008年の世界遺産登録以降、英領植民地時代以来の歴史的建造物や街並みが残るジョージタウン旧市街地の観光空間化への動きが顕在化し、ペナンは「ビーチリゾートの島」から「世界遺産地区」をも擁する島、「東洋と西洋の民族文化が凝縮するエキゾチックな島」へと、その場所的イメージは変質するようになった。

2. ジョージタウンの世界遺産地区と観光資源

ジョージタウンは、マラッカ王国時代、ポルトガル時代そしてオランダ時代をも経験したマラッカとは異なり、1786年にイギリス（東インド会社）がペナン島をケダのスルタン国から租借し、最初から計画的に建設された植民地都市である。自由貿易港としての発展はマレー、中国、インド、アラブ、シーク、シャム、ビルマなどからの多様なアジア移民を到来させ、東洋と西洋の文化が融合するという点で共通するものの、マラッカとは異質な多民族文化の混淆と固有の街並み（文化景観）が形成されることとなった¹³⁾。

ジョージタウンの歴史的核心理部は、1876年にマラッカ海峡に面して築かれたコーン＝ウォリス砦（写真1）、広場（Esplanade）をはさんで向かいあう旧植民地政庁などの旧庁舎から成る空間である（写真2）。そして、広場の周辺にはセントジョージ＝キリスト教会（写真3）や、サマーセット＝モームなどの文豪や有閑富裕層が滞在したことで有名なE&Oホテル（写真4）、ビクトリア女王の即位60



写真1 コーン＝ウォリス砦
(2014年8月22日筆者撮影)



写真2 旧植民地政庁（現・シティホール）
(2007年9月6日筆者撮影)

周年を記念して富豪華人が建てた時計塔（写真5）、などが点在する。こうしたコロニアル様式の白亜の建築物は、海岸通り（Lebuh Pantai）沿いの2～4階建ての建物群へとつながる（写真6）。それらの白亜の建物には旧英領時代以来の税関や貿易会社、銀行などのオフィスが入居している（第2図）。

海岸通りのビジネス街からショップハウスが立ち並ぶ小路を抜けたところに、一代でペラ州の錫産業で富を築きあげた海峡華人が19世紀末に建てたといわれるプラナカン＝マンション（写真7）、そしてヒンドゥー教のマハ＝マリアマン寺院（写真8）を中心とするリトル＝インディアが多くの観光者を集めている（写真9）。また、リトル＝インディアの西を区切るマスジッド＝カピタン＝クリン通り（旧名：ピット通り）沿いには、福建・広東出身の華人が建立した観音寺（写真10）、スマトラ出身の大富豪が寄進したカピタン＝クリン＝モスク（写真11）、福建出身のヤップ（葉）一族の宗廟であるヤップ＝コンシ（公司）（写真12）、クー（邱）一族が建立した宗廟のクー＝コンシ（写真13）、さらに、スマトラアのアチェから移住してきたアラブ商人が建立したアチェ＝モスク（別称：マレー＝モスク）が点在している（写真14）（第1図）。



写真3 セント＝ジョージ教会

右手前にジョージタウンを切り拓いたフランシス＝ライトの廟がある

(2009年10月8日筆者撮影)



写真4 E&O ホテル

(2003年9月16日筆者撮影)



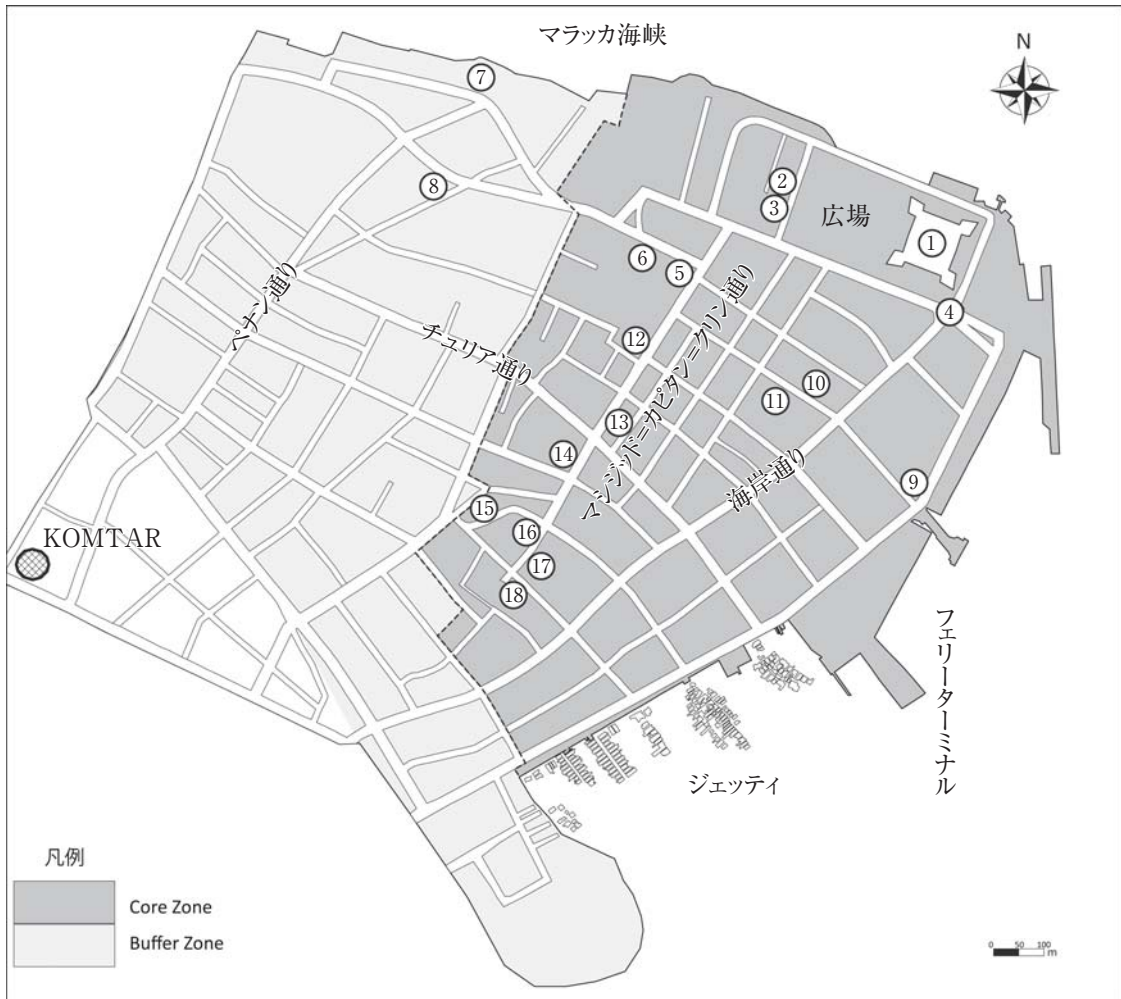
写真5 時計塔

(2003年11月17日筆者撮影)



写真6 海岸通りのオフィス街

(2014年8月22日筆者撮影)



第2図 ジョージタウン世界遺産地区

(谷崎由紀作図)

- | | | | |
|-----------------|---------------|--------------|-------------------|
| ①コーン=ウォリス砦 | ②シティ=ホール | ③タウン=ホール | ④時計塔 |
| ⑤セントジョージ=キリスト教会 | ⑥ペナン=ミュージアム | ⑦E&O ホテル | ⑧チェン=ファツ=ツェ=マンシオン |
| ⑨税関 | ⑩PHT オフィス | ⑪プラナカン=マンシオン | ⑫観音寺 |
| ⑬マハ=マリアマン寺院 | ⑭カピタン=クリン=モスク | ⑮孫文基地記念館 | ⑯ヤップ=コンシ |
| ⑰クー=コンシ | ⑱アチェ=モスク | | |



写真7 プラナカン=マンシオン

ミュージアムとして利活用されている。ジョージタウンに一時期滞在していた孫文をテーマにした映画のロケ地となった (2012年9月5日筆者撮影)



写真8 マハ=マリアマン寺院

(2009年12月23日筆者撮影)



写真9 リトル＝インディア
(2009年10月8日筆者撮影)



写真10 観音寺
(2012年9月7日筆者撮影)



写真11 カピタン＝クリン＝モスク
同モスク前の通りは<harmony street>と愛称されている
(2014年8月22日筆者撮影)



写真12 ヤップ＝コンシ
(2012年9月7日筆者撮影)



写真13 クー＝コンシ
(2009年1月22日筆者撮影)



写真14 アチェ＝モスク
(2014年8月22日筆者撮影)

このような東洋と西洋の多様な歴史的建造物が凝縮、混淆するジョージタウンの世界遺産地区について、マレーシア政府観光局のHPは以下のように紹介している¹⁴⁾。

2008年7月にマラッカとともにユネスコ世界文化遺産として登録されたジョージタウンは、18世紀後半、当時のケダ州スルタンとイギリス東インド会社との条約により、イギリスの植民地として譲渡されました。当時のイギリス東インド会社の総督・フランシス・ライトにより「プリンス・オブ・ウェールズ島」と名付けられ、フランシス・ライトの居住する地区をジョージタウンと名付けました。ジョージタウンは主にイギリス植民地時代の建物と、様々な文化が融合した独特の街並みを今なお残しています。

また、ガイドブック、旅行代理店などのHPや旅行経験者のブログなどでも常套句的に、ジョージタウンが「イギリス・コロニアルな白亜の建築様式」や「東洋と西洋との出会い」に想いを馳せさせるエキゾチックな街並みを今に残すイギリスの旧植民地都市であることが強調され、E&Oホテルでの宿泊やイギリス風のアフタヌーン・ティーを愉しむことが推奨されている¹⁵⁾。『マレーシアペナン 古くて新しいエキゾチックタウンを歩く』¹⁶⁾というジョージタウンを紹介した雑誌の表紙に散りばめられた見出しやキャッチコピーを例示するならば、「ジョージタウン ノスタルジー紀行」、「どうしても泊まりたいブルーマンション」、「ショップハウスを改造したおしゃれカフェ」、「迷路のような旧市街をトライショーで周遊」、「歴史が薫るエキゾチックなアルメニア通り」、「豪華絢爛なプラナカンの文化に酔いしれる」となる。

しかし、「独特の街並みを今なお残して」いるとはいえ、「古くて新しいエキゾチックタウン」と表象されているように、今日のジョージタウンは「古い街並み」を残しつつも、次第に「新たに演出された街並み」に改変されようとしていることに留意しなければならない。実際、世界遺産登録後、ジョージタウンの歴史遺産地区およびその隣接地域においては、植民地期以来のタウンハウスやショップハウスの価値が高まり、外部資本や地元企業によって、空き家や老朽化した建造物がブティックホテルやゲストハウス、カフェ、ギャラリーなどに転用されつつあるのだ（写真15・16）。そして、ジョージタウンの主要な街路は<遺産通り>（Heritage Street）としてガイドマップに書き込まれたり、ゲストハウスやカフェ、土産物店などの看板にも<遺産>という用語が乱用されたり



写真15 カフェやバーに転用されたショップハウス
(2009年10月18日筆者撮影)



写真16 ゲストハウスやカフェに転用されたショップハウス街
(2014年8月24日筆者撮影)

するようになった。

こうした、〈ツーリズムスケープ〉の変貌は、遺産地区の世帯数・人口数、住民構成、経済活動などの変化と、どのように表裏の関係をともなうものであったのだろうか。また、そうした遺産地区の観光空間化はどのような問題を派生し、どのようなくせめぎあいを生起させているのであろうか。

Ⅲ. 世界遺産地区の観光化とジェントリフィケーション

1. 世界遺産地区の変容

ジョージタウンの世界遺産地区を対象に、世界遺産登録後の2009年と2013年に実施された人口・土地利用センサス¹⁾によれば、この5年間で以下のような変化がみられた、という。

第1表にみるように、(同期間に新規世帯が約360あったものの)世帯数は231減、住民数は734人減となっている。ちなみに、転出者には子供を有す若い夫婦(59世帯)、片親世帯(87世帯)、女性(610人)、高齢者、借家人、遺産地区外で就労している者などが含まれている。これに対して、外国人労働者などによる共同生活世帯(group worker households)は39世帯増大している、という。こうした変化は、以下のようなさまざまな要因や過程が相互に関わりあって進行したものと考えられる。すなわち、2000年の「家賃統制令」の廃止や2008年の世界遺産登録によって、遺産地区の不動産価値が上昇し、不動産を新規事業や投機の対象として遺産地区の老朽化した建造物への地元および海外の投資家による需要が高まり、家主の売却意欲を促した。また、不動産価値を高めた建物の所有者、とりわけ若い家族を中心に、狭隘で老朽化したショップハウス住まいよりも遺産地区外での快適な居住環境を求める世帯の転出を促した。あるいは、不動産価格の上昇にともなう家賃の上昇、不動産の売却あるいは改修によって借家人は転出を余儀なくされた。

第1表 ジョージタウンの世界遺産地区における人口・経済活動・土地利用の変化：2009 / 2013年

		2009年	2013年	増減
住民数(人)		10159	9425	△734
世帯数 ¹⁾ (新規世帯数)		2533 (n.a)	2302 (360)	△231 (n.a)
ビジネス(宿泊業を除く) (新規ビジネス:宿泊業を含む)		3279 (n.a)	3177 (660)	△102 (n.a)
宿泊施設	施設数(棟)	61	102	41
	客室数(室)	2246	3080	834
露天・屋台商(建物内)(人)		345	354	9
露天・屋台商(路上)(人)		479	410	△69
労働力(人)		22179	23616	1437
建物	空き家(棟)	864	754	△110
	過去4年以内に改修した建物(棟)	-	221	n.a.
	大規模改修を行った建物(棟)	89	160	71
売却用建物・住居・施設(戸)		16	25	9
賃貸用建物・住居・施設(戸)		171	125	△46

(出典) Think City ほか p.2 : Table A を修正。

注1) 2009年～2013年の世帯数は231減となっているが、その期間中に新規の360世帯が加わったことをふまえれば、590世帯が遺産地区から転出したことになる。

経済活動の変化としては、観光者のためのツーリズム・ホスピタリティ部門やクリエイティブなサービス部門への移行が顕著である。例えば、ホテル（41増）、レストラン・カフェ・バー（47増）、旅行・観光サービス業（21増）、アート・文化・工芸部門（26増）、コンビニエンスストアなどの商店（46増）、服飾・衣服・織物関連部門（19増）の増加が目立つなど、ビジネス景観の変容がみられる。とりわけ、地元経済のツーリズム・ホスピタリティ部門への志向は、遺産地区における最も際立った変化の一つである。バジェットホテル／ゲストハウスやホステルを中心に宿泊施設が増加しており（第2表）、部屋数も2,246室から3,080室へと増えている。

労働力は全体として2009年の22,179人から2013年の23,616へと1,437人増加した。そのうち路上や市場での屋台商・露天商などの数が減少する一方で、ビジネスや宿泊施設の部門で雇用数は増大した。民族集団別の労働力の推移をみると、マレーシア人の比率が93.6%から90.3%に減少し、インド人やバングラデシュ人、インドネシア人など外国人が6.4%から9.7%に増加している。また、マレーシア人のなかで華人やインド系の比率が低下するなかで、マレー系の比率が高まっている点も特徴的である（第3表）。

こうした在来住民の転出と外国人労働者の増加にともない、民族集団別住民構成も変化している。すなわち、第4表にみるように、ジョージタウンの主たる民族集団であった華人系およびインド系マレーシア人が減少する一方で、マレー系マレーシア人、およびバングラデシュ人・インド人などアジア系外国人の世帯が増加している。こうした外国人労働者の増加や観光地化にともなう〈夜間経済〉（night time economy）化の進行によって、遺産地区においてはこれまでと異なる経済社会空間が生成されようとしている。

2. 「家賃統制令」の廃止にともなう世界遺産地区の観光空間化とジェントリフィケーション

こうした急速な経済社会的変化は、面積約2.8km²の遺産地区の再開発を規制、抑制してきた「家賃統制令」（Rent Control Act:1947年制定）が2000年に廃止されたことによる。宇高雄志によれば¹⁸⁾、「家賃統制令」とは、第二次世界大戦後の混乱期中で急増する都市人口とそれにとともなう住宅需要に対応するため、住宅ストックの確保、都市スラム人口の発生を防ぐことを目的として、1948年以前に竣工した建造物を対象に、家賃を実勢市場価格よりも安い第二次世界大戦前の水準を公定価格とするものであった。同法の施行は1966年まで延期されたものの、自由貿易地区における輸出向け工業生産の進展を背景としたペナン経済の急速な成長が続くなか、実勢水準以下の低家賃や借家人保護制度により、家主は不動産収益が見込めず修復や改修など再投資ができない、あるいはデベロッパによる再開発ができない状態が続いた。その結果、旧市街地には戦前期からの老朽化した、も

第2表 ジョージタウンの世界遺産地区における宿泊施設の変化：2009／2013年（単位：棟）

宿泊施設のタイプ	2009年	2013年	増減
ホームステイ	4	9	5
ホステル	2	16	14
ホテル：バジェット（ゲストハウス等）	34	47	13
ホテル：3～5星（70室未満）	8	6	△2
ホテル：3～5星（70室以上）	6	6	0
ホテル：ブティック	2	9	7
合計	56	93	37

（出典）Think City ほか p.70：Table24を修正。

第3表 エスニシティ別労働力の推移：2009／2013年

エスニシティ	2009年		2013年		増減
	人	%	人	%	人
マレーシア人	3425	93.60	3757	90.33	332
華人系	2203	60.21	2316	55.69	113
インド系	715	19.54	717	17.24	2
マレー系	489	13.36	631	15.17	142
ユーラシアン	6	0.16	5	0.12	△1
パキスタン系	2	0.05	3	0.07	1
その他	10	0.27	85	2.04	75
外国人	234	6.40	402	9.67	168
バングラデシュ人	42	1.15	72	1.73	30
カンボジア人	0	0.00	2	0.05	2
中国人	6	0.16	9	0.22	3
インド人	78	2.13	120	2.89	42
インドネシア人	40	1.09	50	1.20	10
フィリピン人	3	0.08	15	0.36	12
ミャンマー人	22	0.60	34	0.82	12
ネパール人	14	0.38	32	0.77	18
パキスタン人	4	0.11	2	0.05	△2
タイ人	3	0.08	7	0.17	4
ベトナム人	2	0.05	12	0.29	10
ヨーロッパ人	2	0.05	9	0.22	7
オーストラリア人	0	0.00	3	0.07	3
その他	18	0.49	35	0.84	17
合計	3669	100.00	4159	100.00	490

(出典) Think City ほか p.31 : Table20 を修正。

第4表 ジョージタウンの世界遺産地区における世帯主のエスニシティの変化：2009／2013年

エスニシティ	2009年		2013年		増減	
	人	%	人	%	人	%
マレーシア人	2241	92.1	1999	86.3	△242	△5.8
華人系	1701	69.9	1505	64.8	△196	△5.1
インド系	304	12.5	242	10.4	△62	△2.1
マレー系	225	9.2	252	10.9	27	1.6
その他	11	0.5	6	0.3	△5	△0.2
外国人	192	7.9	316	13.7	124	5.8
バングラデシュ人	47	1.9	82	3.5	35	1.6
カンボジア人	0	0.0	0	0.0	0	0.0
中国人	8	0.3	12	0.5	4	0.2
インド人	49	2.0	74	3.2	25	1.2
インドネシア人	46	1.9	49	2.1	3	0.2
フィリピン人	2	0.1	7	0.3	5	0.2
ミャンマー人	14	0.6	18	0.8	4	0.2
ネパール人	13	0.5	20	0.9	7	0.3
パキスタン人	0	0.0	1	0.0	1	0.0
タイ人	2	0.1	5	0.2	3	0.1
ベトナム人	5	0.2	11	0.5	6	0.3
イギリス人	1	0.0	4	0.2	3	0.1
オーストラリア人	1	0.0	5	0.2	4	0.2
混住/その他	4	0.21	28	1.2	24	1.0
合計	2433	100.0	2315	100.0	△118	0.0

(出典) Think City ほか p.19 : Table6 を修正。

しくは空き家となったタウンハウスやショップハウス、そして植民地時代以来の街並みの原型が保たれ、伝統的な商いや生業、文化的伝統の多くが保護されることとなった。

しかし、2000年1月に同法は完全撤廃され、不動産価格や家賃が市場価格に転換されるようになり、現存する約4,660戸もの老朽化したタウンハウスやショップハウスの不動産価格は、首都クアラルンプルの都心部並みに高騰するようになった¹⁹⁾。さらに、同時期には世界的に遺産観光ブームが起こっており、2008年にはジョージタウンが世界遺産登録されたこと



写真 17 外国人労働者により改修中のショップハウス
(2014年8月25日筆者撮影)

を契機として、潜在的に観光空間としての価値を備えていた旧市街地はにわかに不動産投資および新規ビジネスの対象となり、空き家および老朽化したタウンハウスやショップハウスをホテルやカフェなどに改装する動き、いいかえれば、資本による遺産地区の商品化が顕在化するようになった²⁰⁾ (写真17)。

こうした世界遺産登録後の旧市街地の変化について、ペナン州政府から調査委託を受けた政府系シンクタンクの Think City は、おおむね好意的な評価を下している。すなわち、遺産地区の登録はジョージタウンを活性化させる契機となった。ユネスコが謳う「顕著な普遍的価値」(Outstanding Universal Values) を危うくするような変化も看取されるが²¹⁾、2009年から2013年にかけて老朽化した建造物は221棟が改修され、以降も217棟が改修中である。こうした投資により約660もの新規事業の参入が呼び込まれるとともに、空き家の数も大きく減少したことにより²²⁾、荒廃の一途をたどってきた同地区の美化につながった。また、地元の文化的価値や遺産を見直す契機ともなり、地元社会を支えるさまざまな団体組織も増加した。そして、なによりも経済活動が活発になったとして、世界遺産登録の効果を強調している。

しかし、その過程で借家人が転居を余儀なくされたり、借家を追われた人々がホームレス化したり、空き家に麻薬中毒者が入り込んだりするなどの問題も起きている²³⁾。また、世界遺産の本来的意義や精神とはかかわりなく、そして、遺産地区の歴史的建造物や街並みや、地区に生きる人々の暮らしそのものの価値を再発見し、それらを未来につないでいこうとする市民による取組みを理解することなく、経済的利益だけを求める遺産地区外からの資本やビジネスの参入は<ジェントリフィケーション>そのものであるとの対抗言説が湧き上がっている。例えば、1980年代半ばから、ペナンの有形無形の歴史遺産の保全と未来への継承に尽力してきた Penang Heritage Trust (以下、PHT) などによる批判が好例である。

3. 世界遺産地区の観光空間化とジェントリフィケーションに対する批判

PHT²⁴⁾ は1986年に設立されたマレーシアでは先駆的な NGO²⁵⁾ の一つであり、町づくりにかかわる国際的ネットワークの拠点として広く知られている。現在、ジャーナリストのクー＝サルマ (Khoo Salma Nasution) 女史が代表を務めている (写真18)。PHT は、ジョージタウンなどペナン島の生きられた歴史的建造物や街並みの保護・保全・修復、旧市街地で生業を営んできた職人 (artisan) の



写真18 ショップハウスを利活用しているPHTのオフィス
プラナカン=マンション（写真7）の近くに位置
（2013年9月18日筆者撮影）



写真19 周ジェッティ
ジェッティを訪れる観光者が増えつつある
（2010年3月1日筆者撮影）

技術や住民による生活文化を〈生きる遺産〉（living heritage）²⁶⁾ としてとらえ、それらを縮退させたり、消滅させたりすることなく次世代に継承していくべきであることを活動の基本的柱としてきた。

またPHTは、地元民や州政府、企業との日常的な対話と実践を通して、世界に類のないペナンの有形無形の文化財の価値や意義の重要性について普及活動を推進し、ジョージタウンの世界遺産登録の実現に貢献した。そして、遺産地区での景観を著しく改変するような開発は規制されているものの、歴史遺産としての建造物や街並みを短絡的に観光開発と結びつけ、老朽化したり、空き家となったりした伝統家屋がシンガポールなどからの外部資本によってブティックホテルやレストラン、カフェなどに転用、活用されていく現状に対して異論を唱えてきた。と同時に、ショップハウスの転用および地価や家賃が高騰することによって、借家からの転出を余儀なくされたり、生業を継続できない住民が出てきている状況に対しても、在来コミュニティの変質や破壊にもつながるものとして批判し、地元民参加型の内発的町づくりに取り組んでいる。

PHTの事務局長を務めるクレメント=リアン（Clement LiangもしくはLiang Chow Ming）氏によれば²⁷⁾、1980年代までペナンでは、政府のみならず社会全体がジョージタウンの建造物の歴史遺産としての価値を認めることはなかった。PHTは、こうした状況を憂えたペナン市民によって設立された草の根的組織であり、歴史遺産は住民自らが日常生活実践を通して継承していくべきであり、それらの遺産は〈死せる〉もの、博物館に展示されるようなものであってはならないとの思想にもとづき、〈ローカル=デモクラシー〉あるいは〈今に生きる遺産〉（living heritage）を基本理念として多彩な活動を実践してきた。

例えば、サフォークハウスやチェン=ファツ=ツェ=マンション（通称：ブル=マンション）など、廃屋同然だった植民地期に建造された邸宅の修復事業に参画してきた。また、衰退の一途をたどってきた華人系ジェッティ（Jetty：棧橋集落）（写真19）のコミュニティ再生プログラムや²⁸⁾、遺産地区住民の〈集合的記憶〉を貴重な文化財（無形遺産）ととらえ、界限に伝わる物語（tales）や口述史（narrative stories）、住民自身のオーラルヒストリーの掘り起こしや採集にも取り組んできた。さらに、1996年より「街の子供たち」（Anak-Anak Kota）代表のジャネット=ピライ女史（Jannet Pillai：マレーシア科学大学芸術学院准教授）との連携を通じて、遺産継承のステーク=ホルダーとして次世代を

担う子どもたちや若者を対象とした遺産教育プログラムを展開してきた²⁹⁾。

ところで、PHTの活動においてしばしば強調して語られるのは、ジョージタウンが植民地期から多民族・多宗教・多文化が共生する社会(harmony society)であり、その象徴こそがキリスト教会、ヒンドゥー寺院、仏教寺院、モスク、中国人の宗族廟などの建造物や多様な民族文化が凝縮、混在する街並みを貫くマスジット＝カピタン＝クリン通りにほかならない、という〈物語〉である。政府は、その界隈に金細工職人が集住していたことから“Gold Bazaar”と命名したが、これに対して、場所や通りの名称のもつ精神的な意味を説いてきたPHTは、さまざまな民族が共住してきたという歴史とその価値を顕彰すべく〈street of harmony〉と呼ぶべきことを提唱してきた(前掲写真11)。なぜならば、英領植民地期以降、この通りの界隈では出自を異にする人々が共生しあい、調和と平和を保つことによって独特のコミュニティと景観を存続させてきた。つまり、この街並みは多民族・多文化共生社会の存在を象徴する景観にほかならない、というのである³⁰⁾。

ところで、遺産地区におけるツーリズムの展開に対して、PHTはどのような立場をとっているのだろうか。まず、遺産地区を単なる観光資源とみなす風潮がますます強くなってきていることに対して否定的である。すなわち、ツーリズムは外部者・観光客だけのためのものであってはならない。仮にツーリズムによって地域経済が活性化し、それによって遺産地区住民の暮らしが向上する契機となろうとも、低所得層を含め地元民も参加できる仕組みが必要である。また、地元民が継承してきた伝統的技術や文化の保護をも企図した持続可能な観光を志すべきである。さらに、ツーリスト(の行動)が過剰存在となり、地元民の日常生活を脅かしたり、観光産業のさらなる過剰参入を呼び込んだりしないようにするためにも、遺産地区への1日当たりの訪問者数を200人から500人に制限するといった考え方も必要であろう。

他方、外からの投資が長く続くとは思えない。ブティックホテルのブームも長くはないだろう。だからこそ、地区住民にとって、転出していった人々の回帰を促すような努力が必要だ。伝統的なショップハウスやコミュニティを支える「家族」が住みにくくなってきているという現状をどのように考えるべきかが大きな課題となっている。建物は残せても、人や家族そしてコミュニティの存続がなければ意味がない。地価の高騰により地元の経済的困窮者は住めなくなってきている。遺産地区は単なる歴史的建造物や歴史的街並みの保存地区、そしてそれらを集客資源とする観光空間ではなく、18世紀末以降、200年以上にわたりさまざまな民族的出自を背景とする住民が築き上げ、集団的記憶が蓄積されてきた生活空間、生活世界にほかならない、とクレメント氏は語る³¹⁾。

同様に、コラムニストのスピーチリー(Speechley, Soon-Tzu)氏³²⁾も遺産地区がいわばその使用価値と交換価値をめぐるせめぎあいの顕在化する空間と化していることを憂慮し、遺産地区で進行している観光化(tourismification)、それを背景とした〈ジェントリフィケーション〉あるいは〈観光空間化する遺産地区〉のありように対して、次のように論難している。

急速なジェントリフィケーションは地価や家賃を高騰させ、長い間住み続けてきた住民たちを追い立てることにつながっている。それにともない、この地区に根づいてきた、ジョージタウンを世界遺産地区の街ならしめてきた「無形文化遺産」ともいべき伝統的な生業などの存続を困難にさせてきている(p.43)。

ジョージタウンは、建造物あるいはそれらの建築様式だけで世界遺産リストに登録されたのではない。遺産地区での伝統的な商い、宗教的慣習、祭礼、食習慣といった無形の遺産も含ま

れており、それらが統合されたものが世界遺産として認定されているのである。伝統は、ジョージタウンのユニークな多文化遺産の生きる証しにほかならない。無形遺産こそ、ユネスコがジョージタウンを遺産登録する際に強調した「顕著な普遍的価値」の鍵となる部分であることを看過してはならない。... ブティックホテルやカフェとして改修され、生まれ変わったショップハウスのファザードの見た目の良さだけが関心を呼んでいるが、その反面、＜本当の意味での遺産＞が失われようとしている (p.47)。(藤巻訳)

むしろ、PHTは遺産地区を訪れる観光客に対して排除の姿勢をとっているわけではない。むしろ訪問者に対して、さまざまな「小さな歴史」が刻み込まれている遺産地区境界の＜痕跡を訪ねる＞ウォーク＝トレイル (walk trail) を推奨しており、PHTスタッフのガイド (むしろ＜インタープリター＞と呼ぶべきだろう) による遺産地区の街歩きプログラムを主催している点は、強調しておかねばならないだろう。それは、政府や観光産業による遺産地区の観光化に対抗して、分厚く地層化された＜真正な＞ (D. マキャーネル)³³⁾「履歴」や「物語」、あるいは「場所の記憶」を訪問者に伝えようとするプロジェクトであるといつてよい。1911年の辛亥革命の前夜、孫文が一時期ペナンに潜み滞在していた家屋 (現在の孫文基地記念館)、また、日本人の参加者が多い場合には、戦前期、「からゆきさん」を含む日本人が小さなコミュニティを築いていたといわれる旧日本人街もウォーク＝トレイルコースに含められている (写真20・21)。その際、在野の研究者として、さまざまな史資料を駆使し、戦前期ペナンにおける旧日本人コミュニティの実相の解明に取り組んでいるクレメント氏³⁴⁾などのPHTスタッフが、ツアーの＜インタープリター＞を務める、という。

しかし、観光客が地元民の日常生活を脅かすほどに過剰存在となったり、観光産業のさらなる参入を呼び込んだりしないようにすべきであるとの期待とは裏腹に、来訪する観光客によって遺産地区はますますにぎわいを増しつつある。こうした現象が顕在化するようになった要因として、筆者の観光の現場での経験から以下をあげることができよう。

第一に、世界遺産登録によりジョージタウンが東南アジアにおける遺産観光の目的地の一つとなり、ASEAN諸国を中心に「学び」を目的とした高校生や大学生などの若者や家族連れの外国人観光客が数多く訪れるようになったこと。第二に、マレーシアでは、政府観光局 (Tourism Malaysia)



写真20 旧日本人街の通り名 (日本新路) を示す標識
近年、ジョージタウンでは歴史地名も併記するようになった
(2013年9月16日筆者撮影)



写真21 旧日本人街 (チントラ通り)
食堂の看板に「日本街」という文字が書き込まれている
(2013年9月16日筆者撮影)

による "Cuti-cuti Malaysia" (ホリデー＝マレーシア) キャンペーンのもと国内観光が推進されてきたが³⁵⁾、世界遺産登録によってジョージタウンの国内観光目的地としてのステータスが高まったこと(実際、遺産観光を通して、自国の歴史・文化を再発見・再評価することを目的にカメラを片手に街歩きするマレーシア人の若者が増えている)。以上にかかわって、第三に、エア＝アジアなどアジア各国の格安航空会社がペナンと国内外各地とを結ぶ就航路線を拡大させたこと(自国とはいえ、南シナ海をはさんだ東マレーシアからのペナンへの訪問者も次第に増加してきている)。そして第四に、遺産地区に<ストリート＝アート>という新たな観光アトラクションが加わったこと、などがあげられる。

それでは、ジョージタウンの遺産地区における<ストリート＝アート>とは何か。また、遺産地区の<ツーリズムスケープ>を特徴づける、どのような観光者による新たな行動が見られるようになったのだろうか。

IV. ストリート＝アートの出現と街歩き観光でにぎわう世界遺産地区

1985年にペナンを初めて訪れる機会を得て以降、そして2003年からは毎年ジョージタウンに足を運び、その<ツーリズムスケープ>のありようを観察してきた筆者の経験からすれば、瞥見するかぎり街並みに大きな変化はなかった。なぜならば、世界遺産登録にともなう建築規制が働いていたからである。しかし前章でも述べたように、ショップハウス街の修復が各所で進められており、「遺産」を冠したゲストハウスやカフェ、アートギャラリー、土産物店が次第に増加していることは実感できる。そして何よりも、<ストリート＝アート>の作品の前で撮影しあうツーリストが目立つようになった点が、世界遺産地区の<ツーリズムスケープ>の変化を端的に物語っているといえよう。

2012年以降ジョージタウンの世界遺産地区では、歴史的建造物や独特の街並みだけでなく、各所に展示されたウォール＝アート(壁画)や針金を使ったワイヤ(アイアン)アートを鑑賞しながら、「自撮り棒」を手にして<街歩き観光>³⁶⁾を楽しむという新たな観光のかたちが評判を呼んでいる(写真22・23)。また、観光トライショー(人力三輪車)に揺られながら(写真24)、流れゆく遺産地区



写真22 壁画の前で写真撮影に興じる観光者
アーネスト＝ザカレビッチ氏の作品「Kids on Bicycle」の前で
(2014年8月22日筆者撮影)



写真23 壁画の前で写真撮影に興じる香港人観光者の家族
アーネスト＝ザカレビッチ氏の作品「Old Motorcycle」の前で
(2014年8月22日筆者撮影)

の< streetscape >を眺め、遊覧するだけでなく、自らが自転車に乗り、観光メディアで「必見」と紹介されている< ストリート=アート >を周遊する観光者の姿も数多くみられるようになった。そして、こうしたニーズに応えるかのように、レンタサイクル=ビジネスも盛んになりつつある。

こうした遺産地区の< 街歩き >と< ストリート=アート >とを組み合わせたジョージタウンにおける新しい観光のかたちは、公式、非公式を問わず、ガイドブックやWeb、SNSなどのさまざまなメディアを通して情報発信されることによって、観光客の関心と呼んでいることはあらためて述べるまでもない。例えばマレーシア政府観光局 (tourism malaysia) は、「ジョージタウンの世界遺産地区には、コミカル&情緒豊かなアートがいっぱい」³⁷⁾と題して、ジョージタウンのストリート=アートを鑑賞しながらの街歩きを次のように推奨している。

ジョージタウンの世界遺産地区は、いまや「アート」の街。リトアニア人アーティストが手掛けた、ペナンの日常を描いたアートが街に9か所、ペナンの今昔のエピソードをコミカルに描いたアイアンアート52か所が街に点在しています。これに刺激を受けたアーティスト達が街のあちこちにアートを施していて、街にはアートを探しながら歩く人たちがいっぱい！世界遺産とアートを眺めながらの街歩きはいかがですか？

世界遺産地区におけるウォール=アートの出現は、ペナン州政府の依頼により、2012年にリトアニア出身の若手アーティストであるアーネスト=ザカレビッチ (Ernest Zacharevic) 氏が、「ジョージタウン=フェスティバル 2012」³⁸⁾の一環として制作した9作品の壁画を端緒とする。いずれの作品もジョージタウンの人々の暮らしをイメージさせるものであり、ショップハウスの壁面に描かれている点が特徴的である。なかでも「Kid on Bicycle」(アルメニア通り)や「Old Motorcycle」(アーキー通り) (前掲写真23)、「Kungfu Girl」(ムントリ通り) (前掲写真24) が人気を集めているようである³⁹⁾。

他方、ワイヤ (アイアン) アートは、クアラルンプルのデザイン会社であるスクラプチュア=アート=ワーク (Sculptureatwork) による鋼鉄を溶接した「3D 戯画」(写真25・26) である⁴⁰⁾。ワイヤ=アートは、ウォール=アートと同様、ショップハウスの壁面を背景に、地元の日常生活のひとコマや裏通りの生きられた歴史をモチーフにしたものであり、現在も制作が進められている。

ところで、アーネスト=ザカレビッチ氏の壁画制作以降、ウォール=アート人気にあやかり、マレーシア国内外のストリート=アーティストによる壁画が遺産地区の各所で登場するようになった(写真27・28)。沖縄出身者による壁画も話題になっている⁴¹⁾。さらに、< ストリート=アート >ブームに便乗し、「3D 壁画」体験撮影を呼び物にしたコーナーを設けた民営のミュージアムすら開館す



写真 24 トライショーに乗りショップハウス街を周遊するシンガポール人観光者の一団
背後の壁画はアーネスト=ザカレビッチ氏の作品「Kungfu Girl」

(2014年8月24日筆者撮影)



写真 25 街角のワイヤ=アート

横のグラフィティはアーネスト=ザカレビッチ氏の作品ではない

(2014年8月22日筆者撮影)



写真 26 街角のワイヤ=アート

(2014年8月22日筆者撮影)



写真 27 壁画人気に便乗して描かれるようになった「没場所」的グラフィティ

(2015年2月4日筆者撮影)



写真 28 レンタサイクル店の客寄せのために描かれたグラフィティ

(2015年2月4日筆者撮影)

るような観光商業化が世界遺産地区で進行している。

こうしたジョージタウンの裏通りを「壁画通り」(Mural Street)にしようという風潮や、地元および欧米のストリート=アーティストが新たにウォール=アートを描こうとする動きに対して、「粗製乱造といってもよいような稚拙なものも少なくない」⁴²⁾と警鐘を鳴らす声が出てきている。PHTのクレメント氏も、「絵柄といい、そのサイズといい、過剰であり、世界遺産地区の景観そのものを破壊している」⁴³⁾と、過熱化するウォール=アート=ブームを憂慮している。そもそも、ペナンにおけるストリート=アートの仕掛け人とも言うべきジョー=シディック氏すら、「ペナンの壁すべてをグラフィティや絵で埋め尽くしたくはない」として、ザカレビッチ氏以降、似たようなプロジェクトが提案されても受け入れてこなかった⁴⁴⁾、という。

PHTは先述のように、マレーシア科学大学のピライ氏のチームとの協同のもと、ジョージタウンの路地をアート=ギャラリーあるいは「壁のない博物館」(オープン=ミュージアム)とみたと、住民自らが築き上げてきた生活世界のありようを書画や絵画などのかたちで表現しようというくスト

リート＝ミュージアム＞プロジェクトを進めてきた。それは世界遺産地区としてユネスコによって認証された地区（コミュニティ）の再生・活性化、そこに暮らす地元民のエンパワメントを引き出し増幅させる手段として、そしてジョージタウンあるいはペナンの人々を「街に回帰させる」ことを企図したものである。

「ペナン、そしてジョージタウンにはストーリーがある。この街のあらゆる街角はギャラリーである」というシディック氏の考え方といい、「ジョージタウンの街角をストリート＝ミュージアムにしたい」という PHT の目指す方向性といい、双方の考え方には大きな隔たりはみられない。しかし、「PHT とく芸術の島 ペナン」を謳う州政府の考え方とは根本的に異なっています。州政府はペナンの知名度を高め、ペナンへの集客力を強めるために、海外から有名なアーティストを招いて祭典を行うという手法を採ってきました。しかし、私たちは、外部者による芸術活動ではなく、地元民による内発的な、生活世界の表現の手段としてのストリート＝アートを追求しているのです⁴⁵⁾とクレメント氏が語っているように、「なぜストリート＝ミュージアムなのか」という根源的問い、すなわち、「ストリート＝ミュージアムの主体（担い手）は誰なのか」、そして「誰のためのストリート＝ミュージアムなのか」といった本質的部分において、両者のスタンスは異なっているように思われる。結果として、地元住民の手になるストリート＝アートが外部者の関心をも呼び、住民の生活空間としての遺産地区がツーリストと地元民との交流を通してにぎわいをみせることと、外発的外生的に演出されたストリート＝アートによって外部者を呼び込むこととは、方向性は全く異なっていることは明らかである。

V. おわりに

2008年7月に、「マラッカとジョージタウン、マラッカ海峡の歴史都市群」としてユネスコ世界遺産に登録された二つの都市は、いずれも観光立国をめざしてきたマレーシアにあって、遺産観光ブームを背景に観光目的地としてこれまで以上に集客力を高めてきた。両都市がユネスコ世界遺産に登録されるにあたり、「顕著な普遍的価値」とされたのは、以下の通りである⁴⁶⁾。

マレーシアのマラッカとジョージタウンは、マラッカ海峡の歴史的植民地都市の類例なき事例であり、古き時代より東洋と西洋とを結ぶ交易拠点として受け継がれてきた歴史的文化的影響を今に体現している。マラッカとジョージタウンは、中東、インド亜大陸、マレー群島を介してイギリスやヨーロッパから中国に至る交易ルートに起源をもつ、今に生きる多文化的遺産をほとんど完全に備えたマラッカ海峡の歴史都市である。数多くの宗教や文化が出会い、共存してきたこの二つの都市はアジアの現存する（living）多文化遺産と伝統の証拠とを今に残している。そうした多文化的遺産と伝統は、類例のない建築、文化、街並みをうみだしたが、それらはマレー群島、インド、中国、そしてヨーロッパに由来する文化的要素の出会いを反映している。（藤巻訳）

しかし、両都市にはいくつかの点で相違点がみられる。第一に、マラッカがポルトガル、オランダ、次いでイギリスの統治を受ける前に、土着のマラッカ王朝の交易拠点としての歴史を有してい

たのに対して、ジョージタウンは最初期からイギリスの統治のもと自由貿易港として開港され、華人やインド人などアジア系移民によって街づくりがなされてきたという点で、歴史的建造物の構成や街並みのありようが異なっている。

第二に、世界遺産地区の保全の取り組み方も異なっている。すなわち「マラッカが、マラッカ＝スルタン＝パレスに象徴されるように、マレー的なものの正統的歴史を保全するために遺産を博物館化するかたちで保全 (a museum-type conservation) することに熱心であるのに対して、... ジョージタウンの場合は遺産地区を構成する建造物や空間に対してだけでなく、遺産地区に暮らす住民に対しても、保全という課題において全く同様に重要な対象とみなしてきた」⁴⁷⁾。

第三に、マラッカでは世界遺産登録後、より集客力を高めるために、遺産地区の隣接地域においてさまざまな過剰ともいえる観光アトラクションの建設が進められ、「大衆観光地化」、「テーマパーク化」と形容してもよいような観光開発が展開している⁴⁸⁾。これに対してジョージタウンでは、1980年代半ばから市民団体による遺産地区の保護・保全に向けた積極的な取り組みがなされ、そのことが州政府の開発・再開発志向に対して一定の抑止力として働いたためか、マラッカのような過度な観光開発は抑制されている。

むしろ、ペナン州政府が全く保護・保全志向的であったわけではない。実際、ペナン島の各地で埋め立てが行われ、埋立地では高層フラットや高級コンドミニアム、ショッピングモールなどの建設が進められ、ジェッティを含む歴史的に価値ある集落の撤去をめぐって、当該地区住民およびそれを支援する PHT などの市民団体と、州政府、デベロッパーとの間でせめぎ合いが繰り返されてきたのである。そうしたなか最近、ペナンで耳目を集めているのは、KOMTAR を観光タワー化する計画であろう。

KOMTAR (Kompleks Tun Abdul Razak の略称) とは、ジョージタウン旧市街地 (世界遺産地区) に隣接する地点に位置する 12 角形のビル (高さ約 232m、地上 65 階建て) であり (写真 29)、1974 年に着工し、1986 年に完成した (第 2 図)。同ビルにはペナン州政府機関とショッピングセンターが入居し、地上部はバスターミナルともなっている複合ビルである。当初、KOMTAR はペナンの経済発展を象徴する高層ビルとして注目され、ペナンヒルと並んで、ペナンのランドマークとして親しまれてきたが、周辺地区や島内他地区での新たな開発にともない商業ビルとしての機能はほとんど失われている。ビル内は薄暗く、閉店中の店舗が多く、閑散としている。地元民が寄り付かない一方で、観光客や近隣に職住するミャンマー人 (地元民は「ビルマ人」と呼ぶ) など外国人労働者の姿が目につく。KOMTAR は、ペナン島南部の工業地区付近に位置するショッピング＝コンプレックスのブキット＝ジャンブルとともに、外国人労働者に「好まれる場所」となっている。最上階は展望台となっているが、メンテナンスが劣悪であるため集客力は無きに等しく、州政府は KOMATR を観光アトラクションとするため



写真 29 ジョージタウンの街並みにそびえ立つ KOMTAR
撮影対象地域は遺産地区の周辺部であるため、ショップハウス街での再開発が進んでいる

(2013 年 9 月 18 日筆者撮影)

展望台を整備し、ペナンを一望しながら展望台に到ることのできる空中エレベーターの建設計画を構想しているという⁴⁹⁾。こうした構想に対して、PHTなどの市民団体からは、世界遺産地区の価値や精神にそぐわない愚かな計画であるとの批判の声が出ている⁵⁰⁾。例えばクレメント氏は、「開発に前向きな州政府の姿勢からすれば、10年後には周辺地区での高層ビル開発が進み、ツーリストは高みからのぞきこむように、KOMTARのガラス張りの空中エレベーターや展望台、そして高層ホテルの客室から眼下に広がる世界遺産地区のパノラマを眺めことができるようになるでしょう」⁵¹⁾。と、皮肉をこめて語る。

それは、地区の住民とともに<生きられた／生きられる>生活世界に直にふれることなく、外部者が窓越しに「一望監視的に」世界遺産地区を眺めおろし、<世界遺産を消費>できる、という構図をイメージしたものといえよう。

[付記] 本稿は、科学研究費助成事業・基盤研究(B)「多民族国家マレーシアの外国人労働者に関する学際的総合的研究」(研究代表者:藤巻正己、研究期間:2012～2014年度 課題番号:24401015)の助成金を活用して行った現地調査の成果の一部である。記して、関係者および関係機関に御礼申し上げます。とりわけPHTのクレメント=リアン氏には、多大なる協力をいただいたことに対し、心より感謝の意を表します。

注

- 1) UNWTO: *UNWTO Tourism Highlights 2014 Edition*, 2014 <http://www.e-unwto.org/doi/pdf/10.18111/9789284416226> (2014年9月7日閲覧) UNWTO Tourism Highlights 2014 edition. ほかによる。
- 2) 藤巻正己「遺産観光ブームに沸くマラッカのツーリズムスケープ瞥見一過熱する観光開発・大衆観光地化・テーマパーク化」(立命館大学地理学教室編『観光の地理学』文理閣, 2015) 304～331頁。
- 3) ①藤巻正己「ツーリズム[in]マレーシアの心象地理—ツーリズムスケープの政治社会地理学的考察—」, 『立命館大学人文科学研究所紀要』95, 2010, 31～71頁。②藤巻正己「ツーリズム・マレーシアに動員されるオランアスリー必要に応じて可視化されるマレー半島の先住民族—」, (江口信清・藤巻正己編著『貧困の超克とツーリズム』, 明石書店, 2010, 所収), 215～248頁。
- 4) (財)自治体国際化協会シンガポール事務所『マレーシアの観光政策(Clair Report No.389)』, 2013年。
- 5) ちなみに、ペナンへの入り込み客数は2007年に520万人であったのが、世界文化遺産に登録された2008年には630万人に急増したという。マレーシアBIZナビ「世界遺産指定で観光客増加、昨年は630万人に」2009年7月30日JST配信(2009年8月5日閲覧)。また、2012年度で609万人、2013年度で620万人であるとの報道もある。マレーシアBIZナビ「ペナン第2大橋、3月1日に開通へ」2014年2月18日JST配信 <http://www.malaysia-navi.jp/news/?mode=d&i=2896> (2014年10月15日閲覧)
- 6) マラッカは、連邦政府与党と同じ政党が州政権を掌握してきたことから、連邦政府によって潤沢かつ迅速な交付金の支給など手厚い後押しを得て、テーマパーク型・大衆観光地型の観光開発を進めてきた。なお、世界文化遺産登録後のマラッカの観光開発の現状と問題については、前掲2)を参照。
- 7) ①アーリ, ジョン(加太宏邦訳)『観光のまなざし』, 法政大学出版局, 1995。②アーリ, ジョン・ラーソン, ヨーナス(加太宏邦訳)『観光のまなざし(増補改訂版)』, 法政大学出版局, 2015。
- 8) 藤巻正己「マレーシアにおける遺産観光と利活用される植民地経験—再資源化されるコロニアリティ, ハイブリディティ—」, (天理大学アメリカス学会編『アメリカスのまなざし—再魔術化される観光—』, 天理大学出版部, 2014) 37～58頁。
- 9) <ツーリズムスケープ>とは筆者の造語であり、その意味するところは以下のとおりである。観光をめぐる諸過程はさまざまな次元の景観/風景(「スケープ」scape)の分泌、生成をともなうものであり、観光の現場でわれわれの眼前に立ち現われる視覚形態は多様な「スケープ」が重なり合い、織り合わされた

複合的多層的なくメタ景観>であると解釈できる。こうした観光の空間・現場において、個人的／集合的に、物理的／想像的に、視覚／幻視される景観を<ツーリズムスケープ>と呼ぶこととする。この語彙が生まれる契機となったのは、アメリカのインド系人類学者のアルジュン＝アパデュライによるグローバル化のフォーメーションに関する「5つのスケープ論」である。

すなわち、グローバルな相互作用のもとでは文化の同質化と異質化との緊張が生ずる。新しいグローバルな文化経済は、複合的で重層的、かつ乖離的な (disjunctive) 秩序とみなされるべきである。現代に生きるわれわれは普遍的で均質な単一の空間内で生きているわけではない。多国籍企業、国家、ディアスポラ、家族、個人といったさまざまなレベルの主体に応じて、想像界が重層的に形成されるグローバル化のフォーメーションを経験し生きている。そしてグローバル化のフォーメーションは、<エスノスケープ> (ethnoscape)、<メディアスケープ> (mediascape)、<テクノスケープ> (technoscape)、<ファイナンススケープ> (financescape)、<イデオスケープ> (ideoscape) という5つの次元のフローによって構成されるとした。

彼の<スケープ>論は、現代の観光のグローバル化、そしてメタ景観としての<ツーリズムスケープ>を理解するうえでも有用である。なぜならば、観光のグローバル化が展開、拡大する空間・場所は、まさに人・資本・情報・モノのトランスナショナルな移動 (フロー) の結節点であるとともに、ツーリストや観光産業にかかわる地元民・外国人労働者、観光産業 (メディアを含む)、政府などの多様な行為主体 (アクター) が交差し、相互に影響を及ぼし合うインターフェースにほかならないからである。観光空間において、さまざまな行為主体はツーリズムが生成する物質的でリアルな、観念的で想像的な、多様で重層的なく<ツーリズムスケープ>が感応、知覚、幻視、経験することだろう。①藤巻正己「『マハティールの都市』クアラルンプール生産されるスペクタクルなツーリズムスケープ」、『立命館大学人文科学研究紀要』93, 2009, 25～53頁, ②藤巻正己「ツーリズム [in] マレーシアの心象地理—ツーリズムスケープの政治社会地理学的考察—」、『立命館大学人文科学研究紀要』95, 2010, 31～71頁, ③藤巻正己「『ツーリズムスケープ』—観光現象のメタ景観論的アプローチ—」、観光学術学会第1回大会 (2012年7月7日, 奈良県立大学) 特別研究発表要旨。なお、アルジュン＝アパデュライの所説については、同原著 (門田健一訳) 「グローバル文化経済における乖離構造と差異」、『思想』933, 2002, 5～31頁、あるいは (門田健一訳) 『さまよえる近代—グローバル化の文化研究—』, 2004, 平凡社, 58～95頁を参照。

- 10) Sustainable Tourism Research Cluster, Universiti Sains Malaysia: *Penang International Travelers Survey: Quarter 4, 2012*, 2012. Q3の7～9月では372名、またQ4の10～12月には431名が調査対象となっている。回答者の出身国 (Q3・Q4平均) は、インドネシア (9.5%)、シンガポール (7.4%)、タイ (4.6%) などASEANから23.9%、ドイツ (5.1%)・イギリス (3.2%) などのヨーロッパから18.9%、中国 (8.7%)・日本 (2.9%) など東アジアから14.1%、サウジアラビア (3.4%)、イラン (3.0%) など西アジアから12.5%、合衆国 (4.6%)・カナダ (3.3%) などアメリカから9.5%、インド (2.7%)・パキスタン (1.8%) など南アジアから7.4%、ナイジェリア (2.6%) などアフリカから5.8%など、となっている (pp.8-10)。
- 11) ペナン＝ラクサ、チャー＝クエイ＝ティアオなどの麺料理や、ニョニヤ料理など、多種多様な民族的背景をもつペナン料理、とくに屋台料理 (hawker foods) は世界的にも知名度が高い。ペナン料理がマレーシアの国民的料理から除外されたり、人気度においてシンガポールに伍したりした際には、ペナンの人々 (Penangites) から失望と批判の声があがるほど、ペナン住民のローカル＝フードに対する愛着度はきわめて高い。マレーシア BIZ ナビ「屋台都市ランク、ペナンがシンガポールに負けた！と怒り」<http://www.malaysia-navi.jp/news/?mode=d&i=912> (2012年7月26日 JST 配信) (2012年7月27日閲覧)
- 12) ペナンの観光地・観光資源は、パトゥ＝フェリングやタンジュン＝ブンガなど北部海岸のマリーンリゾート、ジョージタウンの世界遺産地区にとどまらない。近年、ペナン州政府観光局 (Penang Global Tourism) は、“My Penang where the festivities never end”と標榜しているように、2015年の場合、約60ものイベントを開催することにより、年間を通して国内外からの集客に努めようとしている。例えば、タイプサン (Thaipusam: インド人の祭典、2月2・3日)、春節 (中国正月: 2月19・20日)、ハリヤヤ＝イダルフィトル (Hari Raya Aidilfitri: ムスリムの断食月明けの祝祭、7月17・18日) など、主要民族の祝祭や伝統行事に加え、ペナンという場所性の有無にかかわらず、アニメ＝マツリ＝サマーパーティー (5月23・

- 24日)、国際ドラゴンボートレース(5月30・31日)、盆踊りフェスティバル(7月25日)、ペナンブリッジ国際マラソン(11月22日)、ジャズフェスティバル(12月3～6日)など、多種多様なイベントが開催されることになっている。①ペナン州政府観光局HP <http://www.visitpenang.gov.my/portal3/>、②Penang Global Tourism: “Penang Tourism Calendar of Events 2015” <http://www.visitpenang.gov.my/download2/calendar-of-event-2015.pdf> (2015年8月11日閲覧)
- 13) ペナンの歴史・文化を概説する良書として以下があげられよう。① Hoyt, S. H.: *Old Penang*, Oxford University Press, 2001 <1991>, ② Khoo Su Nin and Khoo Salma Nasution: *Streets of George Town, Penang: An Illustrated Guide to Penang's City Streets and Historic Attractions (the Fourth Edition)*, Penang: Areca Books, 2007 <1993>, ③ Flower, Raymond: *The Penang Adventure: A History of the Pearl of the Orient*, Marshall Cavendish Editions, 2009. とくに、街路や主要な歴史的建造物を紹介しながら、ジョージタウンの地理-歴史を綴った作品(②)は、ジョージタウンに生まれ育ち、この街への〈場所愛〉(トポフィリア)を感じさせる著者の手になるものだけに、初めてこの街を訪れる人にとって良き入門書となろう。また専門書とガイドブックあるいは紀行文の中間的性格を帯びた次の作品も推奨したい。④イワサキチエ・丹保美紀『マラッカ・ペナン 世界遺産の街を歩く-大航海時代へのノスタルジアに誘われて- (地球の歩き方 GEM SONE 040)』, ダイヤモンド・ビックス社, 2009、⑤重松伸司『マラッカ海峡のコスモポリス ペナン』, 大学教育出版, 2012。⑤では、戦前期ペナンの日本人社会に関する記載もある。
- 14) マレーシア政府観光局HP <http://www.tourismmalaysia.or.jp/region/penang/heritage.html> (2014年9月15日閲覧)。
- 15) 批判的観光研究は、こうした植民地経験を有する地域・社会でのコロニアリティを愉しむ観光を〈ポストコロニアル=ツーリズム〉と解釈する。前掲8)
- 16) 『マレーシア ペナン 古くて新しいエキゾチックタウンを歩く』, イカロス出版, 2014。
- 17) Think City Sdn Bhd, Geografia, George Town Heritage Incorporated and Jabatan Perancangan Bandar dan Desa Penang: *George Town World Heritage Site: Population and Land Use Change 2009-2013*, 2014.
- 18) 宇高雄志『マレーシアにおける多民族混住の構図-生活空間にみる民族共存のダイナミズム-』, 明石書店, 2009, 212～222頁。
- 19) マレーシアBIZナビ「ペナンの古いショップハウスが高騰、相場がKL中心部並みに」<http://www.malaysia-navi.jp/news/?mode=d&i=329> (2012年3月22日 JST 配信) (2012年5月14日閲覧)。第二次世界大戦以前に建てられた遺産地区のショップハウスの価格が高騰しており、場所によってはクアラルンプル(KL)中心部の超高級コンドミニアムにも匹敵する1平方フィートあたり2,000リングにもなっている(1マレーシアリング≒30円)。世界遺産に指定される前の2008年当時は、1棟20万リングから80万リングが相場だったが、少なくとも5倍以上にまで高騰した。高額で買い取られた物件はブティックホテルなどに改造されるケースが多く、ある3階建て物件を2008年に300万リングで購入した地元企業家は、1,000万リングをかけて改装し、1泊2,000リングの高級スイートとして売り出そうとしている、という。
- 20) マレーシアBIZナビ「ジョージタウン世界遺産地区にミニホテル3軒開設へ」<http://www.malaysia-navi.jp/news/?mode=d&i=643> (2012年5月10日 15:50 JST 配信) (2012年5月14日閲覧)。地元企業3社が、ビーチ=ストリート界隈などの5階建ての歴史的建築物を3軒のブティックホテル(それぞれ39室、80室、120室)に改装するプロジェクトを進めている、という(ザ・スター, 5月9日)。
- 21) 例えば、歴史的建造物の所有者による違法な増改築が横行するといった問題も起きている。マレーシアBIZナビ「世界遺産地区で違法な増改築相次ぐ、2カ月で57件に」(ザ・スター電子版2010年3月1日記事引用: 2010年3月4日 JST 配信、2013年10月14日閲覧)。同記事によれば、2009年12月から2010年1月にかけて世界遺産のガイドライン違反件数が57件を数えた、という。
- 22) 前掲17) 95頁。
- 23) 前掲18) 216頁。
- 24) ① PHT公式HP: <http://www.pht.org.my/>, ② PHTブログ: <http://pht-jp.blogspot.jp/>。なお、歴史的建造物の保護・保全をめぐるペナン州政府と草の根市民団体とのせめぎあい、その過程でPHTが創設さ

れるに至った経緯については、次を参照。Cheng, E.W. and Ma, Shu-Yun: A City's Status and Its Civil Society', *Penang Monthly*, January 2015, pp.37-42.

- 25) 市民意識が強かったペナンでは、市民団体や NGO 活動が盛んに行われてきた。マレーシアの草分け的な NGO としては、1970 年創設のペナン消費者協会 (Consumers Association of Penang: CAP) がある。CAP は環境問題、食品の安全性、健康問題、持続可能な暮らしのあり方、女性のエンパワメント、人権問題など、市民の日常生活にかかわるさまざまな問題に取り組んできた。CAP 公式 HP: <http://www.consumer.org.my/>
- 26) PHT は遺産地区にあって生業としてきた伝統的技術を伝える職能者 (artisan) をもく生きる遺産 (living heritage) とみなしている。現在 8 名の職能者をく無形文化財 (Artisans PHT-PAPA Apprenticeship) として顕彰し、各人に年金 2000 リングを支給している。また、多民族多文化、プラナカンあるいはハイブリッド文化の社会であることをよく物語っているように、ペナンでは年間 417 回もの祭典が島の各地で開催されるが、それらもく生きる遺産 (無形遺産・無形文化財) である、と認識されている (2015 年 2 月 4 日 PHT での事務局長のクレメント＝リアン氏へのインタビューによる)。
- 27) PHT に関する本文中の記載内容の多くは、2010 年 10 月 29 日および 2014 年 12 月 5 日の立命館大学衣笠キャンパスで開催されたペナンセミナー (立命館大学文学部主催) における PHT 事務局長のクレメント＝リアン氏の講演、および 2010 年 2 月 25 日、2013 年 9 月 18 日、2014 年 8 月 23 日、2015 年 2 月 4 日の PHT での同氏に対するインタビュー内容にもとづいている。
- 28) ジョージタウンが中継貿易港として成長の一途をたどっていた頃、港湾業務に従事する華僑とその家族たちが、陳あるいは周などの宗族ごとにジェッティ＝コミュニティを築いてきた。ジェッティは不法占拠集落であるとして、海岸部の開発プロジェクトにともない立ち退き勧告を受けるなどして 9 つから 7 つに減少した。PHT は当局に対してジェッティの歴史的存在意義を理由に異議申し立てを行うとともに、ジェッティ住民との対話を通して、く今に生きるコミュニティを存続させることの意義を伝える活動を行ってきた。これまで外部に対して閉鎖的であり近寄りがたかったジェッティは、近年ではツーリストの訪問を受け入れるようになり、「水上民宿」を営む家族も出てきている。①マレーシア BIZ ナビ「水上生活のホームステイを開始、ペナン島ワールドキーで」(2008 年 8 月 14 日 JST 配信, 2008 年 9 月 22 日閲覧)、②マレーシア BIZ ナビ「ペナンの水上家屋で遊覧船の運航を計画」(2009 年 4 月 2 日 JST 配信, 2009 年 4 月 3 日閲覧)。

ジェッティについては、次の小冊子が参考になろう。George Town World Heritage Incorporated: *The Clan Jetties of George Town* (発行年未記載)。同冊子ではジェッティの概要、現存する 7 つの、そして 2006 年に撤去された 2 つのジェッティに関する紹介がなされている。ちなみに、同冊子の作成に寄与したクレメント氏は、NHK の世界遺産の番組でナビゲーターとしてジョージタウンの遺産地区、とりわけジェッティを案内、紹介している。「NHK 世界遺産 100 世界遺産コレクション アジア・オセアニア編 マラッカ海峡の歴史的都市群 2」(NHK 総合大阪: 2014 年 9 月 24 日 (水) 4:15 ~ 4:20 放送) 「シリーズ世界遺産 100 マラッカ海峡の歴史的都市群～マレーシア～」 <http://tvtopic.goo.ne.jp/kansai/program/nhk/25394/299371/> (2014 年 12 月 17 日閲覧)。また、番組の概要は次を参照。「世界遺産ライブラリー マラッカ海峡の歴史的都市群 2」 <http://www.nhk.or.jp/sekaiisan/card/cards807.html> (2015 年 8 月 22 日閲覧)

- 29) 2010 年 10 月 29 日立命館大学衣笠キャンパスで開催されたペナン・セミナーでの講演による (演題: Arts ~ Ed: Community-based Arts & Heritage Education Programs, 立命館大学人文科学研究所・文学部共催)。なお、ピライ女史の著作としては以下がある。Pillai, J.: *Cultural Mapping; A Guide to Understanding Place, Community and Continuity*, Strategic Information and Research Development Centre, 2013.
- 30) PHT 代表のクー＝サロマ氏 (Khoo Salma Nasution) の講演メモによる (2010 年 5 月 9 日, 奈良市奈良町センターにおいて開催されたセミナー (社団法人奈良まちづくりセンター主催)。なお、く harmony street > という呼称をめぐる言説について、筆者は次のように論じたことがある。「ジョージタウンの歴史的建造物や異種混雑的な街並みは旧宗主国であるイギリスと旧植民地との権力関係を表象したものであるとのポストコロニアリズムの立場からすれば、それらはイギリスによる植民地支配を物語るく負の遺産>

にほかならない。それを＜harmony＞という価値概念を介することによって、多民族・多文化が調和し（harmony）、共生してきた類まれなる社会として＜正の遺産＞へと読み替えようとするものではないか」と（前掲8）48～49頁）。しかし、Turnbullによれば、第二次世界大戦前のジョージタウンは多民族が共生する＜harmonious society＞であり、ピット（Pitt）通り、すなわち現在のカピタン＝クリン＝モスク通りは、すでに当時（戦前期）から＜harmony street＞として知られていた、という。Turnbull, C.M.: Penang's Changing Role in the Straits Settlements, 1826-1946, (Yeoh Seng Guan, Loh Wei Leng, Khoo Salma Nasution and Neil Khor eds.: *Penang and Its Region: The Story of an Asian Entrepot*, National University of Singapore Press, 2009), p.49.

とはいえ、ジョージタウンには1867年にアルメニア通りを中心とした中国系の宗派（秘密結社）間の武力抗争をきっかけに、マレー人、インド人などの他の移民集団をも巻き込んだ「ペナン大暴動」が勃発し、1892年までジョージタウンでは小競り合いが続いたという「負の歴史」もある。そして、＜harmony street＞と呼ばれるカピタン＝クリン＝モスク通りとアルメニア通り、アチェ通りを結ぶ路地が、騒乱から街を守るために立ち上がったヨーロッパ人たちによって大砲が並べられ、バリケートが築かれたことから“Cannon Street”（Lebuh Cannon）と名づけられたことは付記しておかねばならない。前掲13）⑤：49～54頁。ちなみに、マラッカ世界遺産地区のトコン＝エマス（Tokong Emas）通りも、＜harmony street＞と称されていた点についても留意したい。Hoyt, S. H. (2001 <1993>) *Old Malacca*, Shah Alam, Malaysia: Oxford University Press, p.71.

31) 前掲27)

32) Speechley, Soon-Tzu: All that Glitters in George Town, *Penang Monthly*, January 2015, pp.43-47.

33) マキャーネル, D. (安村克己ほか訳)『ザ・ツーリスト—高度近代社会の構造分析—』, 学文社, 2012.

34) 2010年10月29日、立命館大学衣笠キャンパスで開催されたペナンセミナー（立命館大学文学部主催）においてクレメント氏は、「The Pre-war Japanese Community in Penang（戦前のペナンにおける日本人社会）：1890～1940」と題する講演を行った。

35) マレーシアは歴史的経緯を異にするさまざまな地域および多様な民族から成るモザイク国家であるため、1990年代末から、同国政府は国民統合政策の観点から国内観光政策を推進してきた。前掲9）②。

36) 観光ガイドブックやWeb上でも＜街歩き＞というフレーズが多用されるようになりつつある。例えば、「様々な文化が融合したコロニアルタウン。ペナン島「ジョージタウン」で世界遺産の街を歩く」<http://spotlight-media.jp/article/88940463789172971>（2014年12月2日）（2015年8月10日閲覧）。

37) マレーシア政府観光局HP <http://www.tourismmalaysia.or.jp/region/penang/pdf/street-art-2014.pdf>（2015年8月10日閲覧）。また、ペナン州政府観光局はこれらの作品の所在地を示した地図や画像をWeb上で掲載し、＜ストリート＝アート＞観光を推奨している。ペナン州政府HP: ‘Street Art in George Town’ <http://www.toursimpenang.net.my/pdf/street-art-brouchure.pdf>（2014年9月5日閲覧）。こうした公式的HP以外にも、アート作品の写真画像を掲載、紹介するツーリストたちによるブログも数多くWeb上に登場してきている。①「ノスタルジックな港町「ジョージタウン」のストリート＝アート」<http://spotlight-media.jp/article/88282366164527498>（2014年12月2日）（2015年8月10日閲覧）、②「マレーシア・ペナン島ジョージタウンのストリート＝アート」http://www.asiatravelnote.com/2013/01/12/street_art_of_georgetown.php 2013年1月12日投稿（2014年9月5日閲覧）、③トリップアドバイザー http://www.tripadvisor.jp/LocationPhotoDirectLink-g298302-d1652102-i135431779-George_Town-Penang.html（2015年8月14日閲覧）ほか。ちなみに、台湾でも「檳城徒歩壁画游」<http://www.backpackers.com.tw/forum/showthread.php?t=843156>（2015年8月3日閲覧）として紹介されている。

38) 「ジョージタウン＝フェスティバル」の創設にかかわったジョー＝シディック氏によれば、同祭典は「ペナン島、ジョージタウンの物語を分かち合う＜グローバル＞なフェスティバル」と銘打った州政府主催の世界遺産登録祝いイベントをきっかけに、2010年から毎年、開催されるようになった。そして、「ペナン、そしてジョージタウンにはストーリーがある。この街のあらゆる街角はギャラリーである」とのコンセプトにもとづき、2012年にはザカレビッチ氏によるウォール＝アートの制作が実現した、という。「世界遺産の町から生まれたジョージタウン・フェスティバル」国際交流基金 Performing Arts Network Japan, 2013年2月28日。http://performingarts.jp/J/pre_interview/1302/1.html（2015年8月10日閲覧）。

- 39) イギリスの新聞「ザ・ガーディアン」が選んだ世界の15大壁画に、アジアで唯一、「自転車に乗る子供たち」(Kid on Bicycle)がランクインしたとの報道がある。マレーシアBIZナビ「世界15大壁画、「自転車に乗る子供たち」がランクイン」<http://www.malaysia-navi.jp/news/?mode=d&i=2543> (2013年10月31日JST配信, 2015年8月1日閲覧)
- 40) George Town Steel Rod Sculptures <http://www.penang-traveltips.com/steel-rod-sculptures.htm> (2014年9月5日閲覧)
- 41) 旅行先のジョージタウンの壁画に感銘を受けた日本人バックパッカーがシーサーなど、沖縄をモチーフとした壁画の制作に取り組んでいるという(筆者、同壁画未見)。マレーシアBIZナビ「ジョージタウンの壁画、日本人が沖縄モチーフで挑戦」<http://www.malaysia-navi.jp/news/?mode=d&i=2881> (JST配信: 2014年2月13日, 2014年2月23日閲覧)
- 42) Ferrarese, M.: "An art exchange on Penang's walls and streets", *Penang Monthly*, January 2015, pp.10-12.
- 43) 2015年2月4日, PHT オフィスでのクレメント氏に対する聞き取りによる。
- 44) 前掲39)
- 45) 前掲44)
- 46) ユネスコ世界遺産リスト (World Heritage List) / Melaka and George Town, Historic Cities of the Straits of Malacca <http://whc.unesco.org/en/list/1223> (2014年9月6日閲覧)
- 47) Cheng, E.W. and Ma, Shu-Yun: A City's Status and Its Civil Society', *Penang Monthly*, January 2015, pp.37-42.
- 48) マラッカの大衆観光地化、テーマパーク化をめぐる問題については、前掲2)を参照。なお、マラッカの大衆観光地化、テーマパーク化は決して最近の現象でない。1980年代よりすでに、国内およびASEAN諸国からの観光客を集客するため、郊外にゴルフリゾートやテーマパーク、植物園などのレジャー施設の開発が行われ、(その過程で)「オーセンティックな自然景観および歴史景観が、...人工的なくレジャースケープ> (leisurescape) のために急速に見捨てられてきた」とCartierは論難している。Cartier, C.: 'Megadevelopment in Malaysia: From Heritage Landscapes to "Leisurescapes" in Melaka's Tourism Sector', *Singapore Journal of Tropical Geography*, 19 (2), 1998, pp.151-176.
- 49) マレーシアBIZナビ「ペナンの「コムター」、改装プロジェクトを実施」<http://www.malaysia-navi.jp/news/?mode=d&i=2541> (2013年10月31日JST配信, 2014年10月15日閲覧)。
- 50) 2014年8月23日午後、筆者も同席したKOMTARでの講演会でも、KOMTARの観光装置化に対して、KOMTARのデザインにも関与するとともに、PHTの創設者の一人でもあった長老が反対の弁を述べている。しかし、同氏をPHTの第一世代とするならば、第二世代、第三世代にあたる、クー=サロマ現会長やクレメント事務局長たちは、KOMTARそのものの存在に対して冷ややかな姿勢をとっている点は興味深い。
- 51) 2015年2月4日, PHT オフィスでのクレメント氏に対する聞き取りによる。

(本学文学部教授)

Transformation of “Tourismscape” in George Town of UNESCO World Heritage City, Malaysia:
Contestation over Tourismification of the Historical Heritage Site

by

Masami Fujimaki

George Town on Penang Island, Malaysia, was established as a British colonial town or free trading port at the end of the eighteenth century. George Town witnessed an influx of not only European settlers, such as the British colonists, but also Asian immigrants, such as those of Malay, Indian, Chinese, Arabian, Burmese, and Siamese origin. This influx created a streetscape with features that combine the diverse cultures of the settlers and a place where the Eastern and Western cultures converge. In the 1980s, this town was deteriorating, and a great number of vacant houses began to stand out. Since then, a local NGO of Penang Heritage Trust has taken initiatives for the preservation and restoration of shophouses and townhouses in the old town area, ensuring the continued existence of George Town’s historic scenery. These unique streetscapes together with those in Melaka were registered in 2008 as a UNESCO World Cultural Heritage Site, and Melaka and George Town were dubbed as “Historic Cities of the Straits of Malacca.” The World Heritage registration distinguished George Town as an international tourist destination as never before. Moreover, its property values increased, and consequently, George Town’s streetscape is undergoing a gradual change. This transformation is reflected through changes—such as deteriorated shophouses being converted into guest houses, boutique hotels, café and restaurants—which are implemented using foreign capital. Furthermore, the wall art and wire art exhibited on the walls of the shophouses are becoming a new tourist attraction. Such display projects were implemented under the promotion by Penang State government that declared Penang as an “artistic island.” Accordingly, a new “tourismscape” is being created that cannot be explained by conventional post-colonial tourism discourse. In addition, in the areas around the World Heritage Site, a variety of projects are being developed, taking advantage of the tourism boom caused by the World Heritage distinction. This paper accords additional consideration to the conditions of the “tourismscape” of George Town and the surrounding areas, which are undergoing a process of rapid change because of these recent events.